

体験活動ボランティア養成研修

「自然体験活動指導者養成研修（補助指導者）」

＜文部科学省委託事業＞

平成24年7月7日（土）～8日（日）1泊2日



I 事業の背景（必要性）

中央青少年交流の家が事業を行なう上で、ボランティアの果たす役割は非常に大きい。特に、高校生や大学生は事業に参加する小・中学生と年齢が近いことから、事業担当職員よりも安心感や親近感を与えることができる。また、ボランティアにとって子ども達と触れ合うことは、自分自身の体験を豊かにし自己成長につながる。

そこで、青少年の体験活動に携わるボランティアスタッフに求められる知識・技術・心構え等を身につけ、ボランティア活動の意欲を高めることを目的に本事業を実施する。

また、本事業は、学習指導要領の改訂にともない、「体験活動の充実」が提示され、小学校での集団宿泊活動や中学校での職場体験、高等学校での奉仕体験活動などの推進が提言されていることから、集団宿泊活動において、「全体指導者の指示で青少年の体験活動の指導補助」と「教員等の指導補助として、青少年の健康や安全などの生活に関わる指導」を役割とする「補助指導者」を養成することも目的としている。

II 事業の概要

1. 趣 旨

青少年教育施設や地域等で行われる青少年の体験活動が安全・安心に、かつ効果的に実施できるよう体験活動に関する基礎的な知識・技術を身につけた指導者を養成する。

また、本研修を終了した者は、「独立行政法人国立青少年教育振興機構法人ボランティア」及び文部科学省が推進する「自然体験活動指導者養成事業（補助指導者）」として登録する。

2. 参加者

（1）対象・募集人数

高校生以上で自然体験活動・ボランティア活動に興味・関心のある者、青少年教育・学校教育関係者 40名

（2）参加人数 25人（男性9人、女性16人）

〈所属別参加人数〉

所 属	人数
学校教員	2人
大学生	16人
高校生	2人
青少年教育施設	2人
その他	3人

〈地域別参加人数〉

所 属	静岡県内	静岡県外
教員（2人）	御殿場市・周知郡森町	
大学生（16人）	2校（6人）	4校（10人）
高校生（2人）	御殿場市・沼津市	
青少年教育施設（2人）	沼津市	神奈川県
その他（3）	御殿場市・磐田市	東京都

（3）広報の方法

①募集チラシの作成

②近県教育学部・社会福祉学部系大学ならびに、近隣大学ボランティアサークル団体へ送付

- ③静岡県内市町村教育委員会，駿東地区高等学校へ送付
御殿場市内高等学校へ訪問依頼
- ④地元新聞社に掲載依頼

3. 日 程

	10:10	10:20	12:20	14:00	17:00	18:00	20:00
7日 (土)		開講式 リエンテー ション	青少年の成長 と体験活動	昼食	体験活動の指導法・ 技術	休憩	体験活動の指導法・ 技術
8日 (日)	9:00	安全管理と応急処置		12:00 昼食	13:00 指導者の役割 と心構え	15:00 ガバンス 閉講式	15:30 (解散)

4. 内 容

(1)「青少年の成長と体験活動」(講義) 講師：静岡大学教授 阿部 耕也 氏

- ① 最近の子ども達は，ゲームにばかり夢中になっているように思われがちであるが，それは様々な遊びや体験の場を知らないだけであり，むしろ体を使った活動には，積極的に取り組む傾向にある。そこで，子ども達が自ら進んで学ぼうとするきっかけや，環境づくりへの配慮が求められている。



- ② 模擬選挙への参加や職業体験など，政治や社会のしくみについて体験を通して学んでいるドイツの「ミニミュンヘン」についての説明や，駄菓子屋を拠点に子ども達が自ら積極的に地域の歴史や伝統を調べる活動を通して，町おこしに取り組んでいる静岡市の「まちなびや」などの実践について紹介した。

(2)「体験活動の指導法・技術」(講義・演習)

講師：プロジェクトアドベンチャージャパン®トレーナー 杉村 厚子 氏

- ① 初対面の参加者が安心して，グループや全体での活動ができるようになるための様々な方法を実際に体験し，その必要性について改めて考えた。
- ② 活動している時には当たり前のように聞き流されてしまう何気ない一言が，その場の雰囲気やすすめ方に大きな影響を与えることを実感していた。



(3)「安全管理と応急処置」(講義・実習)

講師：国立中央青少年交流の家 次長 小林 真一
看護師 滝田 笑子

- ① 過去に所内で実際に発生した，玄関前のステンレスマットでの転倒や野外炊事のナタによる手の負傷等を参考事例に，発生原因とその後の対策について説明した。
- ② 活動前，活動中，活動後という3つの場面において，どのような危険が予想されるかを事前に洗い出しすることが安全への第1歩となる。
- ③ 「危険予知シート」を利用し，野外炊事での危険についてグループ，全体で確認した。

- ④ 体験活動を含め、日常生活場面でも発生しやすい虫さされやねんざ等の応急処置の方法について、実習を取り入れながら説明した。

(4)「指導者の役割と心構え」(講義) 講師：東海大学教授 妻鹿 ふみ子 氏

- ① ボランティア活動は、無償性から得られる信頼、肩書きや組織にとらわれない強さ、つながることにより予測不能な思いがけないネットワークづくりをもたらすなどの可能性のある活動であることを学んだ。
- ② ボランティア活動は、多様化、複雑化する社会生活の中での課題解決のための手段や閉塞感のある社会状況を打破する活動として、また、地域での新しい助け合いのしくみとして期待が寄せられているなど、ボランティア活動の意義について学んだ。

5. 評価

(1) 評価の方法

参加者全員にアンケートの実施
別紙(アンケート集計用紙)

(2) 結果

①事業全体をとおしての満足度

満足・・・・・・・・・・・・・・・・・・19人(80%)
やや満足・・・・・・・・・・・・・・・・・・5人(20%)

②自由記述

- ・「新鮮なことばかり学ぶことができて良かった。これまでレクなどを行なうとき、子どもに何か学びとってもらおうと言うことは意識していなかったもので、これからは少し意識していきたい」
- ・「自分たちで実際に活動することにより、具体的な方法やそのときの気持ちを知ることができました」
- ・「参加者としての体験だけでなく、実際にリーダーとして人前で指導する機会も体験してみたい」

III 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

(1) コミュニケーション力を身につける研修プログラム

青少年の体験活動事業でボランティアスタッフとして活動するために求められる重要な資質の一つに「コミュニケーション力」がある。

ボランティアスタッフ自身が、事業に参加した青少年と人間関係を築く力であり、そして、ボランティアスタッフ同士、あるいは施設職員とチームワークを築く力である。

ボランティアスタッフには自分自身のコミュニケーション力を基盤に、指導者の立場で、事業に参加した青少年のコミュニケーション力を高める支援を行うことが求められる。

一方、研修プログラムは、文部科学省が策定した「指導者養成カリキュラム」に基づいて計画することになっており、テーマや内容等は施設の企画に任されている。

そこで、研修カリキュラムの「自然体験活動の技術」と「体験活動の指導法」として、「コミュニケーション力を身に付ける」ことに重点を置き計画した。

まずは実習を通して、コミュニケーション力の意味や必要性を体感する。その後、講義で理論的なことを説明することにより、知識の定着を図った。

(2) 応急処置のスキルを身に付ける研修プログラム

「指導者養成カリキュラム」には、「安全管理」がある。青少年の体験活動事業、特に、野外で行う自然体験活動では、指導者や支援者に「安全管理」に関する知識・技術が求められる。

とはいえ、安全上、重大な責任を負うような活動の指導・支援に、ボランティアスタッフが単独で当ることはないし、主催者は当たらせてはならないといえよう。

そこで、「安全管理」では、安全管理に関する基礎的な知識を理解する講習と、野外活動で起こりやすい傷病への応急処置の技術を習得する実習を行い、より実践的なスキルを身に付けることとした。

2. 運営のポイント

- ① 集中して取り組めるよう、十分な休憩時間の確保と、情報交換の場を兼ねた簡単な湯茶コーナーを設置した。
- ② 受講希望者に情報入手方法を確認するとともに、友人で活動に興味を持っている方を紹介してもらうなどの広報に努めた。
- ③ 宣伝用パンフレットを作成し、近隣大学の学生課に掲示可能な枚数を問い合わせ、送付するとともに掲示を依頼した。
- ④ 近隣大学のボランティアサークルに開催要項、チラシを直接送付した。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① アンケートの満足度や自由記述から、事業の所期の目的は達成することができたといえよう。
- ② 受講後、国立青少年教育振興機構の仕組みである「法人ボランティア」に登録し、夏季休業中に実施した体験活動事業で、ボランティアスタッフとして活動した青年がいる。
- ③ 初めての参加者にとって、体験活動が子どもの成長に大きな役割を果たしていること、ボランティア活動とはどのような活動であるのかを知る機会となり、経験者にとっては、これまでの自分自身の活動を見つめ直し、今後の活動へのさらなる意欲付けとすることができた。

(2) 課題

- ① 本事業は5年目であり、毎年、研修プログラムを見直しながら実施しているが、引き続き、効果的な研修プログラムとするための検証・検討が必要である。
- ② ボランティアとして養成するばかりでなく、ボランティアスタッフとして活動する場である、青少年教育施設での体験活動事業や学校が行う集団宿泊活動、学校放課後子どもプラン事業や学校支援地域本部事業などの地域での活動等を紹介することも必要である。
- ③ また、活動の場を紹介するばかりでなく、当所がボランティアコーディネーターとなって、より積極的に活動の機会を作り出したり、紹介したりすることも課題であろう。

担当：佐粧和也，柴田勝好，中村匡寛